フィヨルドと氷河の山めぐり

——北欧最高峰，ガルヒョピゲン山登頂——

1989.7.16～24　　岩　毅，淳子

この夏，新婚旅行でノルウェーに行ってきたので，その話を書きたいと思います。

まず，なぜノルウェーかといいますと，私は北海道生れのせいか，北方志向があるのと，9年前のヨーロッパ一人旅で，このノルウェーの手つかずの大自然に魅せられたためでしょう。

ノルウェーは現地名NORGEと言い，英国同様，王様が居ます。北緯58°～71°にまたがる細長い国で，その距離，1752km，また国土の1/3は北極圏内にあり，アラスカと同緯度ですが，メキシコ湾流のおかげで，気候は北海道並です。面積は日本と同じですが，人口は410万人しかなく，10万都市も首都オスロ(45万)，港町ベルゲン(23万)，古都トロンハイム(13万)の3市だけです。

通貨はクローネ(1Nkr＝20円)。物価は，ヨーロッパ一高いが，円高のおかげで日本と変わりません。

言語はノルウェー語。英語は本当に誰れでも通じるが，道路・鉄道等の表示はノルウェー語だけです。オスロの書店で，英語＝ノルウェー語のミニ辞書を買いとても重宝した。

日本人旅行者はオスロ以外では，ほとんど見かけない。まして，山岳地域では皆無です。しかし，日本製品はどこにでもあり，車，オーディオ，カメラ，VTR，etc。対日感情は良いが，まあ，遠い極東の不思議な大国から来た人々というイメージか？

ノルウェー南西部テレマーク地方が，スキー発祥の地と言われ，1867年にはスキーが国技となっています。

当然，スキーは盛んであり，また，山スキーもポピュラーです。但し，その名の通り，テレマーク党が多いようです。

登山も、また盛んで，オスロには，登山・山スキー専門の総合案内所（DNT＝Den Norske Touristforeningen）があり，ノルウェー全土の山の情報，山小屋の利用に関すること，各種パンフレットが得られる。また，大きな書店では，著名な山域の1/10万の登山地図，さらに，官製1/5万図は日本同様，全土の発行がなされており，オスロでは，ノルウェー中～南部のものが手に入る。他地域の1/5万図は，該当地域の主要都市の書店，案内所で手に入る。

登山用品は，アウトドア用品の店にある。トロンハイムでは5店あったが，どこも，釣具が店内の60％をしめていた。オスロでは昨年，1軒だけ寄ったが同様だった。コンロ類はオプティマスがあった。ガスコンロはキャンピングガスのカートリッジがバルブ内蔵のタイプ（CV－200）しか無かった。カートリッジとの接合がネジ込みタイプは一切なし。PRIMUSはスウェーデン製なのでオスロで探せばあるかもしれない。その他，ザック，シュラフ，足回りは品数は多くないが，必要なものは手に入るようだ。ジフィーズの類はほとんど無い。

夏山シーズンは6/下～8/下だが，7/上～中は雨が多い。山スキーは3/上～4/下がベストシーズンのようだ。中でも、3/下～4/上のイースターの前後は山小屋はどこもOPENしていて，多くの人が山に入るようだ。

代表的な登山エリアは，南から，Hardanger-Vidda，Jotunheimen，Dovre-Romsdalです。それぞれ，特徴があり，ハルダンゲルビダは，1000～1250mの広大な高原地帯に大小無数の氷跡湖があり，これらを結んで

多くのルートがある。但し，あまり顕著なピークは無い。ヨツンハイメンは私達が今回行ったところで，北欧の屋根，ノルウェー最大の山域で，副題に示した北欧最高峰Galdhøpigen（2469m），第二位Glittertind（2452m）など，2300m以上のピークが20座，氷河はヨーロッパ最大の大陸氷河Jostedalsbreenほか10以上，湖も大小20以上に及び，東西100km，南北120kmに及ぶ大山塊で，国立公園になっており，夏はサマースキー場が2ケ所（リフトあり），冬は山スキーのメッカとなる。ドブレロムスダルは岩登りで有名で高度差1000mの壁がいくつもあり，北欧のマッターホルン，Romsdals-horn（1554m）はとりわけ有名です。これら以外にも，北部のLofoten諸島やBodø-Tysfjord山域には世界的な奇峰群があり，9年前と昨年，車窓からそれらを見るだけで感激した思い出があります。

これらの山域へのアプローチは，ノルウェーは人口が希薄なため公共交通機関の便が悪く，車がとても有効です。私も，昨年，今年ともレンタカーを5～8日間借りました。道路事情はその地形的制約から良いとは言えず，主要道でもすれ違いに苦労することも多々あります。その代わり，車窓の景色は抜群です。速度制限は市内30～50km/h，市外90km/hで市内は守りますが市外は100km/hをこえる車も少なくありません。悪路を100km/hで飛ばす彼らのテクニックは大したもので，また，マナーも日本に比べて，かなり良いです。まあ，車の絶対量が違い，どこも空いていますが。ガソリン代，レンタカー代とも，日本と変わりません。ちなみに，右側通行，左ハンドル，ガソリンスタンドはどこもセルフサービスです。（自分で給油する。）

長いイントロを経て，今回の山旅の話に入りたいと思います。

私達がノルウェーに着いたのは7月16日。日本では梅雨の終りで，連日30℃をこえていましたが，こちら

オスロでは14℃，国内便（国内便は，現地で購入するとかなり安い券が手に入る，特に6/中～8/中は夏割31があり，ノルウェー全土1フライト350 Nkr＝7000円です）を乗り継いでトロンハイムに着くと，何と，9℃，どんより曇り，時おり冷たい雨，まるで，日本の冬です。天気予報（毎日，1950，TVである）では，山岳部では雪も降る悪天とのこと。仕方なく，雨のフィヨルドめぐりをよぎなくされる。20日頃に，めざす，ヨツンハイメンに入るようにドライブプランを組むが果たして予報通り，回復するか不安であった。

17日は一日中，トロンハイムの町で，ウィンドウショッピングなどして，18日出発。

ノルウェー中部の田園地帯（北海道によく似た景色だった）を走り，ドブレ・ロムスダル山域の玄関口，オンダルスネスに泊り，さらに，ノルウェーでも指折の景観がある，Trollstigen ～ Norddal ～ Geirangerと行く。道はフィヨルドの岸辺（海抜0m）から氷河端がせまる峠（1000～1300 m）にかけ登り，また，フィヨルドにかけ下る。峠での絶景，滝，氷河，フィヨルド，道は時には泥道（未舗装）にもなり，雪もちらつく天気でも，景色は素晴らしい。

20日になる。この日，ヨツンハイメンに入る日である。予報通り午後から快晴，週間予報がピッタリ当るなんて，日本では信じられない。この日は，ヨーロッパ最大の大陸氷河Jostedalsbreenの端にある，サマースキー場，Stryn Sommar Skisenterに寄り，スキーの誘惑にかられるが，明日からの登山を考えて，登山口のLomの町に入る。ここで，情報と食料を仕入れ，Galdhøpigen中腹のJuvvasshyttaに上がる。

この山小屋は標高1700mにあり，OPENは6/15～10/4。ここにもスキーリフトがあり，夏スキーを楽しんでる人がいる。夕食後，山岳ガイドと話をした。（ほとんど，彼が話した。私は英語がpoorであんまりわからない。）登山者のうち外人（ノルウェー人以外）は10

%程度で，日本人は年間2人だけ（君たち2人しかいない……）。冬はこのあたりは山スキーがとても盛んなそうな。ヒュッテの窓から，純白に輝くGlittertindが望めた。標高差1000mにおよぶ大斜面が見渡せ，あそこもなかなか面白い山スキーができる，とガイドが言っていた。この日の夕日は，午後10時40分。こちらに来てから，一日がやたら長く感じる。

翌21日，朝から快晴のドピーカン。今日の登山者は50名ほど，全員，出発前，ヒュッテの前で，ガイド（昨日，話したんだった）から説明を受ける。Galdhøpigenへは，Juvvasshyttaから と，Spiterstulenからの2ルートがあり，前者は途中，Styggebreen氷河を渡るため，このときだけガイドに従いアンザイレンすることが義務づけられている，その説明である。ノルウェー人がほとんどなので，ノルウェー語の説明である。何となくわかるような気もするが，それが気のせいであることは，通訳（ノルウェー語→英語）してくれたベルゲンの大学生の説明でわかる。今年のヨツンハイメンは例年になく雪が多く，ほぼ山頂まで雪の上を歩く。夏でも山スキーができるな，と思っていたら氷河上さシュプールのあとがあり，それを追っていくと，前方に，山スキー屋が3人いる。彼らは，我々が氷河を抜け，尾根を登っている頃，山頂から華麗に滑ってきた。このとき，スキーを日本においてきたのを当然，後悔した。

昼すぎに山頂につく。山頂には，小ぎれいな小屋があり，そこで，先に登っていたガイドが登頂証明ハガキを売っている。山頂からはGlitertindを初め，多くの峰々，氷河が望める。氷河はアルプスと違い，ゆったりとあくまでも広く，そして，峰々が氷河に浮かぶように立っている。冬には，峰々の頂きまで雪がせまり，頂さ氷河が結んで，いたるところ，絶好の山スキールートとなるそうである。

山頂には1時間ほど居て，下り始める。帰りも氷河

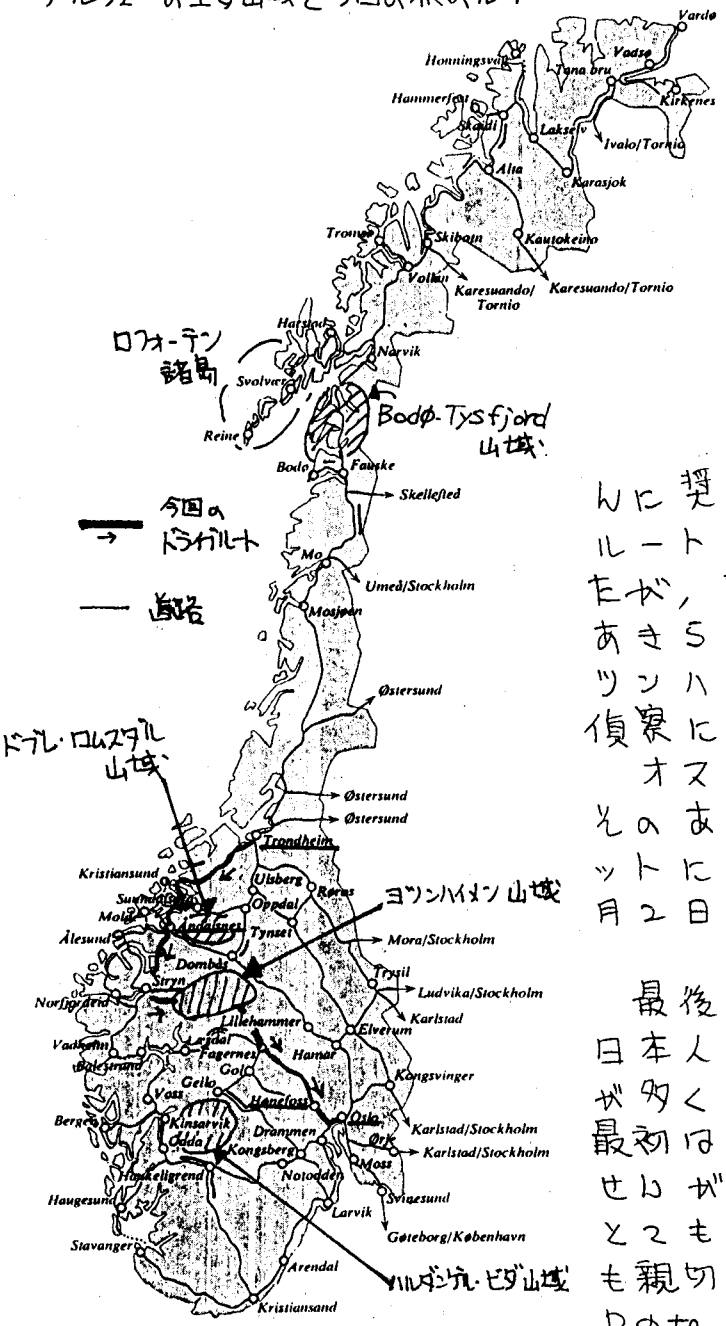
のところでアンザイレンする。50人を15～20人程度の3つの班に分け，それぞれ，先頭はガイドである。とんでもなく長いアンザイレンである。

夕方，と言っても未だ十分明るいが，Juvvasshyttaに着いたあと，車で一端，右により，山をぐるっと半周して，ヨツンハイメンの中心，Spiterstulenに着く。ここは，Galdhøpigenを西に，Glittertindを東にした右，Visdalenのほぼ中央にあり，四方を山に囲まれ，山屋には絶好のロケーションである。営業も2/10～5/1，5/20～10/20と長く，特に，2～4月は山スキーの基地となるそうである。ただ，ハイシーズンはかなり混むため予約が必要で，今回も，7/17に電話したがキャビン（ホテルとキャビンがある）の方しかとれなかった。キャビンといっても，一部屋に2段ベッドがひとつあり（すなわち2人部屋），毛布もあって，仲々きれいである。シャワー，洗面所，トイレは共同である。シュラフはあると便利だが，無くとも，シーツを借りれば良い。自炊は不可。食事はホテルのレストランかカフェで食べる。

ノルウェーの山小屋は4種類あり，JuvvasshyttaやSpiterstulenのように，ほぼホテルと変わらないもの，日本の北アルプスの山小屋のように，食事サービス，寝具はあるが，個室は無いもの，食糧燃料寝具はあるが，料理その他すべて自分でするタイプ，最後に小屋だけで，食糧燃料寝具すべて自分で運んでくるタイプである。DNTにリストがあり，タイプ，OPENの期間，カギの所在等が記載され，また1/10万の登山地図には山小屋の位置とタイプが示されている。

夕食のとき，テーブルが一緒になった中年のノルウェー人夫妻（Røteさん）と仲良くなる。このあと，2日間ばかり，夕食後は，この夫妻と一緒に楽しむ。別れ際，今度ノルウェーに来るときは，私達のキャビン（別荘）に招待したいと，とてもうれしい，お誘いを受ける。

ノルウェーの主要山域と今回の旅のルート



この山小屋には23日まで滞在してVisdalenの奥まで歩いたりする。当初は、Gllitertindに登るつもりであったが、これは山スキーのためにとっておくことにした(!?)。

23日は、Røteさんに勧められたGjende地峡ルートを歩くつもりであったが、朝寝坊してしまい、あきらめ、次回のためにヨツンハイメンの他の山々の偵察に車を走らせる。

オスロには24日に着き、そのあと、スイスツェルマットに一週間滞在して、8月2日帰国した。

最後に、ノルウェー人は日本人と似ていて内気な人が多く、とっつきにくく、最初はあまり多くを語りませんが、よく話しますと、とても暖かい人達で、とても親切です。今回の旅でもRøteさんをはじめ、このような暖かいノルウェー人の友人がたくさん得られ、これは、今回の旅の最大の喜びと言えるかもしれません。END。

ヨツンハイメン山域 中心部 及び 今回の山行ルート図

今回の山行ルート ━━━

氷河 ▨

3t : 3hours

------ : 登山ルート

1/100.000

0 1 2 3 4 km

ヨツンハイメン山域の主な山スキールート （ノルウェー語のヨツンハイメンのガイドブック「JOTUNHEIMEN, Turguide, VågåNATNET - GJENDE」より）

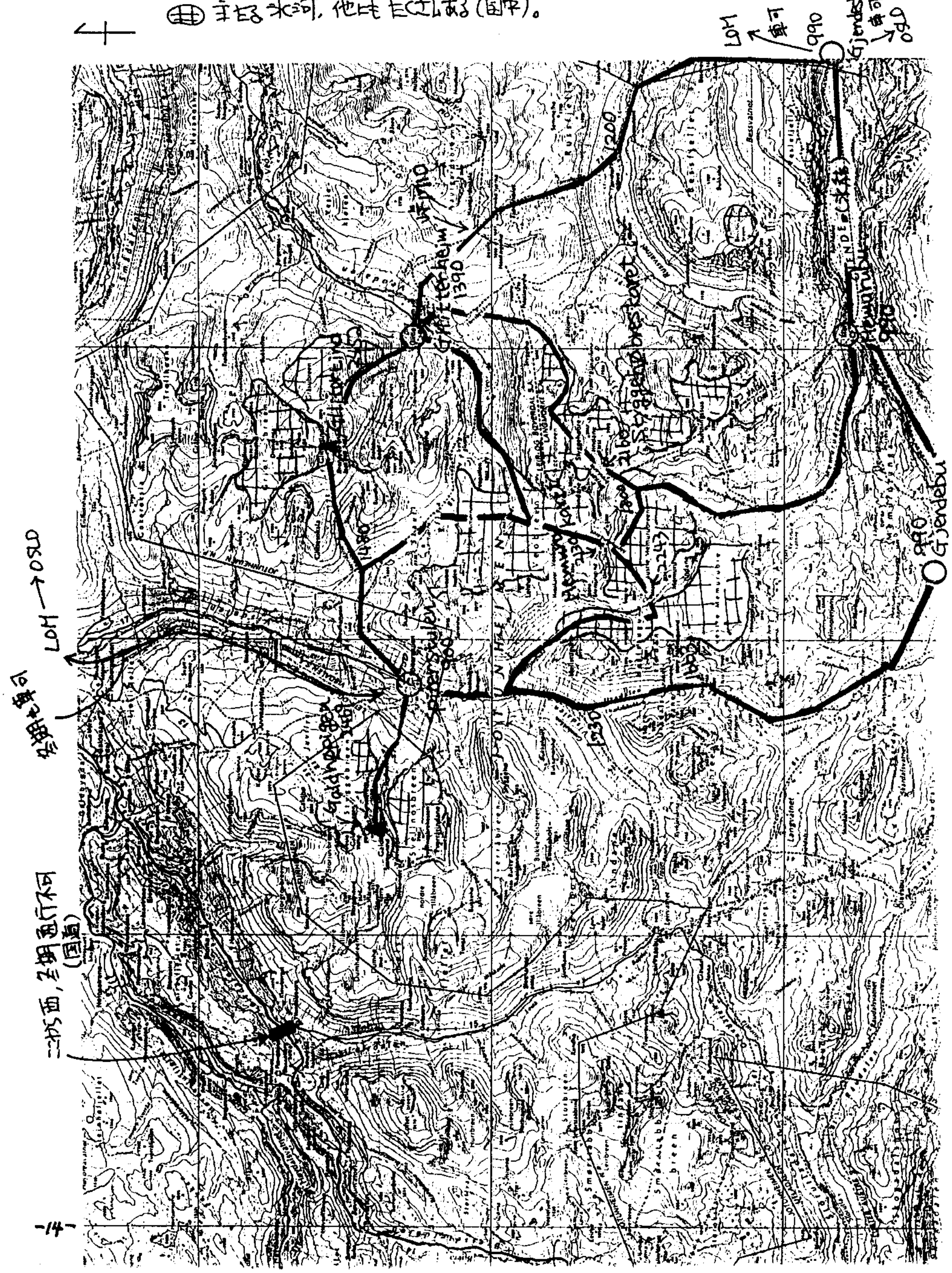
等高線：太細100m、細線20m

○：イースター前後3週間、OPENしている山小屋

▬：ガイドにある、山スキールート

数字：標高

⊕ 主たる氷河、他にもたくさんある（図中）。

1/200.000

0 2 4 6 km